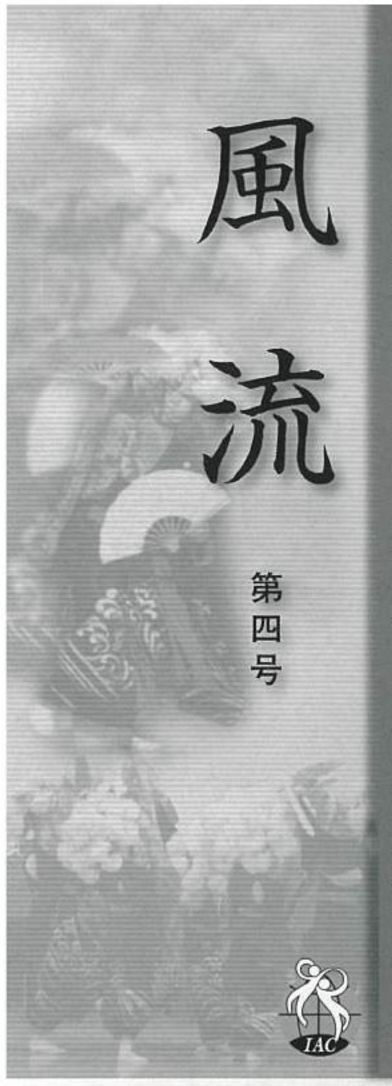

風流

NPO法人 国際芸術家センター（IAC）会報

第四号

二〇〇八年一月一日 発行

題字背景●「秋保の田植踊（日本民族舞踊団の舞台から）」（写真：飯島 篤）

日本文化の魅力は地方で発見できる
―「ふるさと」の祭りが守り育てる共同体意識

国際教養大学教授 勝又美智雄

秋田に移り住んで四回目の正月を迎える。九州で生まれて首都圏で育ち、三十二年間の新聞記者生活のほとんどが東京だった。二〇〇四年に秋田市郊外に開学した大学に勤めるため単身赴任を始めたが、毎日すこぶる快適に過ごしている。

まず四季の移り変わりがきっぱりと鮮やかだ。春の花見から夏の緑、秋の紅葉、そして冬の雪景色が見事で、飽きることがない。山海の食材は豊富だし、物価は東京の六、七割程度だ。地酒が旨いし、美人が多い。そして何より嬉しいのは、四季折々の祭礼行事、伝統芸能文化が地元の人たちにしっかりと支えられて、今に息づいていることだ。

正月は神社へ奉納する梵天祭りに始まって、小正月行事のカマクラ、火を使ったドンド焼き、天筆焼き、早春の初午祭りから万灯火、初夏の鹿島流し、奉納舞の番楽がある。夏は近隣県を含めて祭りの追っかけに夢中になる。七月下旬の土崎の曳山祭りを皮切りに八戸の三社大祭、青森のねぶた祭り、盛岡のさんさ祭り、秋田の竿灯祭、湯沢の七夕絵灯ろう、さらに秋田の三大盆踊りである西馬音内、毛馬内、一日市のそれぞれ個性豊かな盆踊りが続き、花輪ばやし、大曲の花火競技大会を経て、九月上旬の角館の山車ぶつけまで、実に魅力的な夏祭りが目白押しなのだ。大晦日には男鹿半島に招かれて、なまはげの青鬼になり「泣く子はいねがー」と民家の幼い子どもを脅す役までやらせてもらった。

そうした体験を通して気付くのは、どこの祭礼でも山車を操るのは若者が中心だが、祭り全体を仕切るのは中高年のベテラン勢であり、かつて主役だった長老たちが「顧問」「目付け役」となって機嫌よく脇を固め、若者の指導をしていることだ。東北にはまだまだ地域社会の行事に老・中・青の三世代が協力し合う態勢が残っている。年に一度のお祭りには首都圏に進学・就職している若者たちが故郷に戻ってくる。若者たちは幼いときから両親に連れられて祭りを体験しているし、小中学校にもなれば伝統芸能の踊りや唄、お囃子を練習し、行事や競技にも参加している。そうした体験があるからこそ、祭りの時には皆が集まって、「故郷共同体」の一体感を共有するわけだ。聞けば、同級生が集まれば、いくつになっても学校の成績のいい者よりも、祭りのときにどの役をやったかが「偉い」と尊敬される基準になっているという。

現在は、こうして地元の人たちが「故郷」を実感して楽しむ祭りが、観光の大きな目玉になっている。東北のねぶた、竿灯、七夕の3大祭りには毎年全国から数百万人の観光客が訪れる。そこでわかることは、観光客を最もよく惹きつけるのは地域に根ざした芸能であり、地元の人たちがまず誇りを持って大事にし、楽しんでいるからこそ、外の人たちにも大きな魅力になっているということだ。単に観光客目当てにイベントを企画しても、決して長続きはしない。今、全国の自治体が「観光立県」を目指して競っているが、そのための「地域おこし」は地元文化の再発見と再生が原点になければならない。

IACの日本民族舞踊団が全国各地の民俗芸能を舞台化し、国内各地や海外で公演していることは、地方文化の魅力を全国に、さらには世界に「日本文化の魅力」として普遍化し、普及させる試みとしてきわめて貴重な活動だ。私自身、十年ほど前から何回か舞踊団の舞台を見て、「地方文化の豊かさ」に気付かされた一人だ。

最近、たまに東京に行き、電車に乗り、雑踏の中を歩いていると、多くの人の表情に生気がないと感じてしまう。「癒しの温泉旅行」ブームが続いているが、都会人が旅に出たがるのは、非日常的な所に行きたいというよりも、むしろ自分の「心のふるさと」を探し求めているからではないだろうか。そうした「自分探しの旅」は実は、地方文化に触れて、それをじっくりと味わう中でこそ報われるのではないか、と私は考えている。

2007年もあとわずか。
文化交流で積み重ねていく世界各国での人と人との相互理解が、
回り道のように見えても、平和な暮らしやすい地球への近道だと信じています。
2008年が、皆様にとって素敵な年になりますように。

パリと東京 どちらがきれい？

写真と文 持田 和夫

「上を見る」と華麗な建物や周到な街造りで問題なくパリが○か。

視線をズッと落とし、「下を見る（これが今回のテーマ）」と東京に軍配があがるか。

家庭からのゴミはどうなっている？

燃えるゴミ、燃えないゴミ、再生できるゴミの色分けされた三つの容器（かなり大きい）が道路脇の空き地やアパートの中庭など一定の場所に置いてあり、毎日、清掃員が収集車で集めに来るのがパリ。しかし、表通りや広場など人の大勢集まる場所ではゴミが無造作に捨てられているのもこの街。テロ以後、公共の場からゴミ箱が消えたせいもあってのことか。

一方の東京。道路巾が狭くゴミ箱など置く場所もない。週一回又は二回の朝、分別したゴミを定位置に出す約束だが、これが守られない場所が多い。収集日に関係なく、昼夜構わずポイ捨てもある。

こうなると、どちらがきれいとも云いがたいが、パリっ子気質の独特な云い分がある。「オレたちがゴミで道を汚すのは掃除をして賃金を得て生活するヤツらのためになっているからだ」と。（これは差別か人種問題につながるのでは？）

「下を見る話」その二。十年前のパリの足もとは「犬の落とし物」で危なくて真っすぐ歩けなかった。店の入口で愛犬？の「落し物」を見届けて、ゆっくり立去る令夫人風に店の主人が大声でガナリたてているマンガチックな光景をよく見かけたが。今世紀に入って市長のキモ入りでポスターを貼ったり、小型専用清掃車を作ったりしたが、これが功を奏したかは？らしい。が、観光者から見ると不思議なくらい減っている。でも、秋になると落葉の下が危ない。公園や並木道をマドモアゼル（マダムでもいいか）と手を取り合っていい気になって歩いているとヌルッとくる。かっこ悪いから気を付けて！

（日本写真家協会会員・IAC会員）

上：犬を連れたマダム
下：あふれるゴミ箱（いずれもパリ市内）

日本民族舞踊団制作室からの報告

「浦山の獅子舞」調査と「秩父夜祭」見学会

松村尚志

浦山大日堂の獅子舞「剣懸り」（撮影：飯田邦生）

十月二十七日、二十八日に、「秩父市浦山の獅子舞」の調査を行いました。初日は大雨でダメでしたが、二日目は快晴で昌安寺の「大狂い」から大日堂への道行き、そこで何回も舞われる「剣懸り」、最後に部落の家々を廻っての「悪魔祓い」まで一日しっかりと見学・調査ができました。参加したのは中川芳和・とし子夫妻、藤田一郎、松村尚志（以上会員）、飯田邦生、福井宏美（調査研究部会）の六名でした。

十二月三日には「秩父夜祭」の見学会を行いました。午後二時、理事長の西武秩父駅到着に合わせて集合し、すぐ隣の「御旅所」（最後に笠鉾・屋台が集結する）から大通りに据えてある屋台を見つつ上町の木崎氏（会員）宅に到着、お酒や料理をご馳走になりました。のち上町屋台の巡行に付いて大混雑の秩父神社境内へ。御旅所への笠鉾・屋台の行列が出発するころ盛大な花火が始まります。八時過ぎ、帰京される理事長を駅に送ってからは花火を見たり町を歩いたりし、十一時に笠鉾・屋台の集結までがんばって解散しました。一部の人は昼間、中町屋台の張り出し舞台で演じられた歌舞伎芝居も見ることが出来て、充実した見学会となりました。参加者は山口洋一、木崎一男、富美子、中川芳和、とし子、並木孝、藤田一郎、松村尚志（以上会員）、飯田邦生、松川國昭（調査研究部会）の各氏でした。秩父在住の木崎・中川両夫妻にはお世話になりました。厚くお礼を申し上げます。

事務局便り

▶「エストニア」、バルト3国の一番北側に位置するこの国が独立90周年を記念して、民族舞踊団レイガリッドを日本に派遣します。IAC主催の東京公演は2月26日（火）19時、みらい座いけぶくろ（豊島公会堂）です。前回のソプラス来日に続いての「ユネスコ世界無形文化遺産の踊り」です。ご期待ください。

▶「日本民族舞踊団」が3月1日（土）午後、赤坂区民センターでの「世界舞踊祭」に招待出演し、2演目を披露します。たくさんの団体の中で、ひときわ光る舞台芸術としての作品は喝采を浴びるでしょう。

▶「理事長山口洋一を囲む会」を3月初旬、横浜市栄区で調整中。外交官としての経験から国際相互理解、文化交流についても興味深い楽しい話が飛び出すことでしょう。詳しくは改めてお知らせします。

（理事・事務局長 金屋輝美）

IAC会報「風流」第四号 2008（平成20）年1月1日発行（年4回、1・4・7・10月発行）
発行：NPO法人国際芸術家センター（IAC） 編集：「風流」編集部 〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-20-10-206 TEL：03-5426-2047 FAX：03-5426-2048
E-mail：iactokyo@d1.dion.ne.jp http://www.d1.dion.ne.jp/~iactokyo/

米国・アラスカ州との文化交流

実施期間 ：2007 年 10 月 8 日（月）成田発～ 10 月 24 日（水）帰国

文化使節メンバー ：藤田めぐみ（ヴァイオリニスト）、世良留実（バレエ教師 / 振付家）、後藤環（ヴァイオリニスト）、藤野由美子（英語講師）、小田切藍良（バレエ修業中、中学 2 年生）

世界各国と文化交流事業を展開しているIACの活動のひとつに、自分の得意分野を活かして一人ひとりが民間大使として、日本と海外の相互理解を個人レベルで深める事業があります。今年も5名の会員がアラスカ州を訪問しました。異文化圏の家庭にホームステイをしての様々な体験をそれぞれ披露していただきました。

＊帰国後、取材を受けた「東京新聞」と小田切さんの活動を紹介した「広報つくば」の記事

＊藤野さんも指導した MEH 高等学校での習字の授業と生徒たちの作品

＊藤田さんと後藤さんのヴァイオリンで「アマテラス」を踊る世良さん（上）と、世良さん振付の「神々の宴」をシトカのバレエ教室の生徒たちと踊る小田切さん。着物風の衣装に、皆大喜び(下)。(アラスカン・エクスチェンジ公演から)

＊アラスカン・エクスチェンジの公演の様子を一面トップで伝える現地の新聞

＊シトカ市長・マルコ・デプセヴィッチ氏（後列の男性）と。前列左から、藤野さん、小田切さん、後藤さん、藤田さん　後列左　世良さん、市長の両側の女性たちはホストマザー

5 人の滞在中のプログラム

藤田さん 後藤さん	シトカ	●ヴァイオリン教室でのワークショップと合同演奏 ●アラスカン・エクスチェンジでの公演 ●ニュー・アーケエンジェルダンサーズと一緒に小学校訪問	●ラジオ出演 ●パイオニアホームでの演奏
	ジュノー	●ジュノーオーケストラに賛助出演	
世良さん 小田切さん	シトカ	●ワークショップと振付（世良） ●パイオニアホームでのミニパフォーマンス（世良）	●アラスカン・エクスチェンジでの公演 ●中学校での授業に参加（小田切）
藤野さん	シトカ	● Keet 小学校訪問　茶道のデモンストレーション	● MEH 高等学校　書道の授業をアシスト
全員参加	シトカ	●シトカ市長・マルコ・デプセヴィッチ氏を表敬訪問 ●アラスカデーボール（舞踏会）〈小田切さんを除く〉	●消防署見学
	ジュノー	●小学校訪問	

国際交流……人と人との輪、広がれ世界へ！

藤田 めぐみ ● ヴァイオリン

今年はさらに成長しているこの地域密着の旅。昨年は、皆目見当もつかないまま、シトカに飛び込みました。……それが！　シトカのクリス・フルトンさんをはじめ沢山の人との交流の中で、いつしか友達として意識されるような付き合いになりました。

私事ですが、CDを作る強力なきっかけにもなりました。そして、今年は、行く前から、ヴァイオリンの演奏曲目、バレエの曲も決まりました。

色々な楽器の混ざったアンサンブルという新たな試みは、多くの市民に喜んでいただき、ワークショップでは、ヴァイオリンを習っている子どもたちはアラスカデーフラッグの合奏、バレエの子どもたちにも生音（二本のヴァイオリン）で、創作バレエの舞台を体験させ、保護者からも感謝されました。

とにかくお客さんが素晴らしい！　舞台上の人と時間を共有しようと積極的に関わってくださる。

不思議なのはそのような状態だと、自分がまるで宇宙の広がりのような感覚になって、自由に空間を飛びまわっているのです。ここでこうしていることが、感謝、という感じで。

ジュノーオーケストラへの参加も実り多く、次はいつ来る？　と。私個人的には、技術的、音楽的にも得るもの、感じるもの、考えさせられるもの多く、国民性の違いの面白さも改めて思い知りました。

この間、シトカのステイ先からメールで「……息子が急に非常に珍しい重い病にかかってしまった……人生とはいつ、どのような事が起こるかわからない……」でも、彼女はこれを受け入れ、息子の回復に向け、前向きに努力しています。このような報告をくださる事に国際交流以上のものが流れていると思うのは私一人の筈はありません。

今後もIACの世界各国への文化使節団の派遣で、地域、個人レベルで深い国際交流が展開されることを願っています。

アラスカ・シトカで振付を通して

世良 留実 ● バレエ

今回のシトカでは、めぐみさん達のヴァイオリン演奏で、現地のバレエスタジオの生徒と共に踊る楽しい経験が出来ました。作品は、私のソロで「春の海」、10～12歳の生徒の「中国の太鼓」、12～15歳の生徒の「神々の宴」、最後に「アマテラス」を私のソロで踊らせて頂きました。カーテンコールでは、会場全体から大きな拍手を頂き、スタンディングオベーションで幕がおりました。

振り付けに際しましては、当初、私の拙い英語で日本神話をモチーフにした作品の意図を、生徒達が理解してくれるのかどうか、また宗教的に問題はないのか等心配でしたが、国境も人種も越え一つの目標に向かい皆で舞台を創りあげる事が出来ました。

また、アラスカデーフェスティバルの最終日の、アラスカデーには市全体が祭日となり、いろいろなグループによるパレードが行われ、公共施設では様々なビュッフェスタイルの軽食を用意し、市民をもてなしていました。

私は市民に混じりロシア人の男性の衣装で、パレードに参加し、観光客から写真を撮られたりしました。その後パイオニアホーム（市街地の中心にある老人ホーム）でのパフォーマンスでも、めぐみさん、環さんの演奏で「春の海」を踊ることが出来、日本びいきのシトカの方々にはとても喜んで頂きました。

今や、シトカを第二の故郷のように感じています。

今年はさらに、ジュノーも訪問し、小さな交流ですが、少しづつ広がりを見せている事がとても嬉しいです。

私達のように、皆が持てる力を利用して民間大使として様々な国際交流が出来るよう、IACの活動が、さらに広がり続けると良いと思いました。

ヴァイオリンと共に

後藤 環 ● ヴァイオリン

シトカもジュノーも、どちらも山と森と海と広い空、それら全てが贅沢に混在し、そこに住む人々は皆心から自分の街を愛して誇りに思っているようなのが印象的でした。私達は、様々な場面でパフォーマンスの機会に恵まれ、マスコミに取り上げていただく事にもなったわけですが、去年のめぐみ先生&留実さんの印象が余程強烈だった事によるものだろうと思います。

お客様は暖かく、惜しみない拍手と喝采を下さり、それが自分の励みとなり糧となりました。

乏しい語学力の中、身振り手振り（そして音楽！）を交えて会話をし、真剣に話しあったり笑いあったりしながら、人間関係を築いてきた感じです。

涙もありました。心が通い始めてきた友達にしばしサヨナラしなくてはいけなかった瞬間、そして個人的な準備が足りないままオーケストラの本番を迎えなければいけなかった日の前夜、など。そういった笑いも涙も、単なる旅行では得られない貴重な体験だったと思います。

もしもまた再訪の機会があるならば、様々な意味で今よりも成長した自分でありたいものです。

このような機会を与えて下さったIAC、ホストマザーには感謝の心でいっぱいです。共に旅するご縁となった四人にも、この場を借りて…ありがとうございました。

バレエで、初めて国際交流

小田切 藍良 ● バレエ

昨年の、アラスカでの国際交流のお話をバレエの世良留実先生から聞かせていただいてから、いろいろな国々の人たちと、バレエで友達になれたら素敵だな、私にもできるかな、そんな思いから、今回はじめての国際交流が実現しました。

まずホームステイですが、いろいろな不安が一瞬にして消えてしまう程、本当の家族の様に優しくて、とても嬉かったです。片言の会話（日本の話をしたり、アラスカのことを聞いたり）心・雰囲気・それだけで、もう・国際交流　アラスカ家族の一員になりきっていたように思えました。学校訪問をしたときは、全部の授業を皆と、受けました。音楽の授業で、日本の「ほたるこい」の歌をしました、そこでお手本をといわれ、アラスカで、「ほーほーほーたるこい……」っと、歌ってきました "Oh! Great!" と言われたりしてはずかしいけれど、とても嬉しく思いました。

そしてやはり、一番印象に残ったことは、公演です。音楽や、バレエを通して表現し、共に学び共感出来ることは、とても素敵なことだと思いました。

今回私が文化使節の一員として同行出来たことは、自分にとっても沢山勉強になりました。

私は、中学生ですが、小さな国際交流が出来たと思います。国と国、心と心、何の壁もない世界平和の一歩につながるそんなお手伝いをさせていただけたことは、大変名誉なことです。そして感謝の気持ちでいっぱいです、是非又、機会があったら参加したいと強く思います。

文化交流プログラムに参加しての所感

藤野 由美子 ● 英語教師

今回、演奏活動とは全く無縁の自分が、日本文化紹介ということで参加させて頂きました。

シトカのKEET小学校の五年生のクラスでの茶道のデモと、アラスカ先住民の子弟が通う、ほぼ全寮制のMEHハイスクールでの日本語初級クラスの習字の授業の見学及びお手伝いをさせて頂きました。

茶道では、限られた時間内での、ごく簡単な説明をし、実際にお茶を点て、少量ですが全員に飲んで頂きました。反応を心配しましたが、ほぼ全員「いける！」とのことで、安堵しました。予想以上に日本に対する質問も活発で、国土の大きさ、人口密度の高さ、中には漢字に興味を示す生徒もいて、ノートに書き留めていました。

習字のクラスは一年に二度だけで、アラスカ出身の先生が、まず筆の持ち方、墨の説明、基礎の文字を示した後、ひらがな、カタカナ、漢字、更に墨絵まで紹介し、その後、生徒達が自由に作品を完成させ、コンテストのため教室の廊下に張り出しました。日本人の授業だと、書き順、形等に重点を置きがちですが、まず、興味を持たせ、楽しくやることを大切にしていると感じました。

普通の旅行ではできない体験をたくさんしましたが、ホームステイ先を含め、まだまだ日本に対する認知度は低いと感じました。小規模でも、日本側主催の日本紹介コーナーを設けたら、もっと多くの普通の人にも日本を理解してもらえたのではないかと思いました。

IACとアラスカとの文化交流の経緯

二〇〇五年九月、アメリカのアラスカ州シトカ（ロシア領時代の首都）を活動拠点とするダンスグループ、ニュー・アーケインジェル・ダンサーズ（NAD）を招聘。世良留実さんはロシアンダンスでアラスカの文化を伝えるNADの東京公演に魅了され、翌二〇〇六年十月、ヴァイオリニストの藤田めぐみさんを誘いシトカで、毎年十月にアラスカがアメリカ領になったことを記念する「アラスカ・デー」のフェスティバルに合わせ現地を訪問。シトカの市民との交流が大きな成果を上げたことで、今年も現地から熱いラブコールを受け、五名とパワーアップした文化使節として、訪問地も州都ジュノーも加えた長い滞在となった。